

紙版 **ハコブネ×ブックス** vol.10

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐ web サイトです。



フラダン

作者 古内一絵
出版社 小峰書店
発行 2016年9月
ISBN 978-4338287104



水泳部を辞めた種が勧誘されたのはフラダンを愛好会。そこに集まった四人の男子生徒と女子生徒たちが、フラガールズ甲子園を目指すことになりすが、ただの部活モノではいられないのが、こゝ、**福島**というロケーションです。小学生の時に、あの震災に遭遇した子どもたちも五年が経って高校生になっていきます。同じ被災者同士でも、被害のレベルには違いがあり、迂闊に相手の素性を聞くこともできません。復興を望みながらも、八方塞がりな状況を前に**複雑な気持ち**を抱いている高校生たち。やがて、隠されていた互いの胸の内や、秘めた想いが明らかにされていきます。穢れ、悲しみや辛い気持ちであっても、言葉にして話をする意味を感じていきます。フラダンスの躍動感と友愛の気持ちが、行き違いになった子どもたちの心を結びつけていく物語です。



パンキン・ロード

作者 森島いずみ
出版社 学研教育出版
発行 2013年2月
ISBN 978-4052035920



東京に住む小学六年生の女の子、早紀は、お父さんを幼い頃に事故で亡くし、お母さんと二人で暮らしていました。劇団員として全国を公演で飛び回っているお母さんが、宮城県に向かった日、あの震災が発生します。東北地方から多数の悲報が届く中、早紀もまた連絡がつかないお母さんを心配する気持ちを募らせていました。遺体も見つからないまま、お母さんは**亡くなったと推定**するしかない状況で、一人きりの早紀は、山梨県の八ヶ岳のふもととの町で暮らしている、一度も会ったことのないお母さんの父親であるおじいさんと暮らすことになりました。ぶつさらばうで寡黙なおじいさんと心の距離を縮めながら、早紀が回復していく日々が描かれます。幸福な大逆転はないまま、失われたものを受け入れ、これからは生きていく早紀の姿が胸をうちます。

特集 **あの震災を描く児童文学の挑戦**

あの震災とはどの震災のことなのか。はっきりと口にするのがためらわれるのは、触れることへの恐れがあるからです。被災した当事者にとっては、数十年が経ったとしても客観的に捉えられないだろう**生々しい記憶**を描く、児童文学の挑戦について考えます。被災した子どもたちが失ったものの大きさは計り知れず、傷つけることを怖れて、どう言葉を書いたら良いのかわからない。それでも、人を励ますには、**言葉をかけなければならぬ**、と思うのです。物語という「言葉」は人を励まし、勇気づけます。事件の当事者の想いを、読者はより身近に受けとめることもできます。未知の世界への想像力を広げることも、現実には主人公と近い体験をした人へのまなざしを変えていくこともできるでしょう。人はどうやって**喪失感を乗り越えていく**のか。当事者としての時間を生きている登場人物たちに心を添わせることで見えてくるものがあるはずで。



いつか、太陽の船

作者 村中李衣
出版社 新日本出版社
発行 2019年3月
ISBN 978-4406063371



六年前のあの震災の津波で、家も、父親の職場であった造船工場も失われ、宮城県の気仙沼から北海道の根室の港町に家族と移り住んだ小学生の海翔。元は工場の倉庫だった場所に家族四人で暮らしながら、造船の仕事を続ける父親は、いつか気仙沼に帰って工場を復活させる夢を持ち続けていました。大人たちの**再起への決意**に感じ入りながらも、自分がなにもできないことに海翔は**失意を抱いて**います。避難中に飼った犬のスパナとはぐれたことに苦しみ続ける海翔は、**心の痛み**を今も感じています。それでも、この港町のひととの触れ合いや、ベトナムからの技術研修生との交流を通じて、海翔も次第に自分の足場を固めていきます。人に支えられていることを体感して、静かに心を動かされていく少年は、戸惑いつつも少しずつ何かを掴んでいくのです。



この川のむこうに君がいる

作者 濱野京子
出版社 理論社
発行 2018年11月
ISBN 978-4652202890



自分のことを誰も知らない高校に梨乃が進学したのは、**素性を気取られたくなかった**からです。あの震災の被災者。津波で兄を亡くし、水害で家に住めなくなり埼玉に越してきた**可哀想な子**。そんな目で見られることが嫌だったのです。高校の吹奏楽部には、福島出身で、被災したことを自ら表明する同じ一年生の男子、紺野がいました。邪気もなく紺野に同情する同級生に梨乃は複雑な感情を抱きます。川をひとつ隔てただけで被害の程度が違い、同じ被災者にも濃淡がある。もつと酷い目に遭った人に対して、どう顔を向けたらいいのか。自分も痛みを抱えながら、**人の痛みにも向かい合わなければ**ならない辛さを克服しようとする高校生たち。自分のスタンスを模索する梨乃の等身大の感覚が一篇の物語になっていきます。



岬のマヨイガ (柏葉幸子) 講談社 2015年9月



あの震災の日、津波を逃れて避難所の体育館で偶然出会った見知らずの三人は、擬似家族として岬のマヨイガ(迷い家)で暮らしながら、封印が解かれ放たれた、かつてこの土地で暴れていた猛威を**迎え撃ちます**。児童文学ファンタジーの名手による、震災と、『遠野物語』にも伝わる伝承の世界と、現代的なエッセンスが混濁した**奇想の物語**です。

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.10

2020年3月1日発行 ●発行人 きむらともお

事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト **ハコブネ×ブックス** (非営利) を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作他、諸々を受賞。



Twitter 連携しています。

© tomoostretch